

●第十六回新選組書展の課題について

課題①「誠」

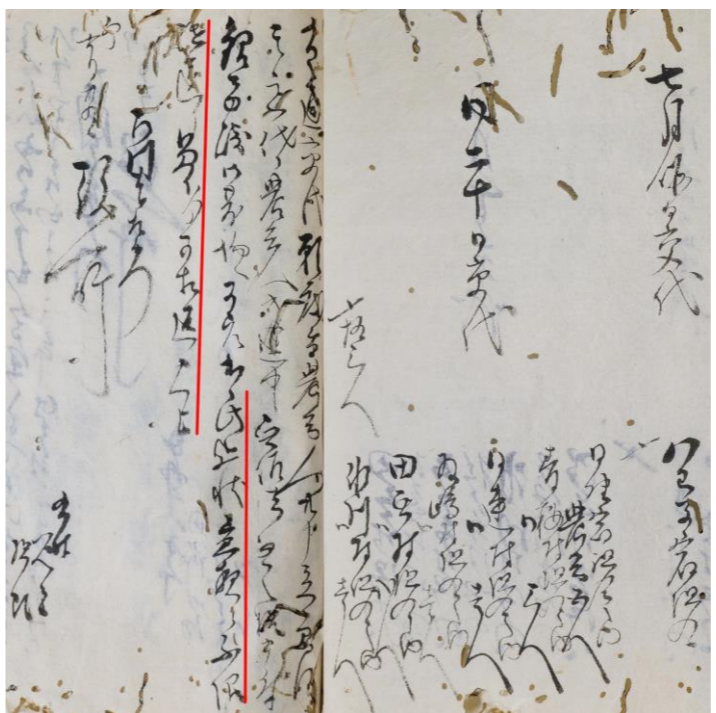
新選組の袖章や隊旗などに使われた、新選組を象徴する一文字。例年の課題です。

課題②「早々順達 留より可相返候」

今回の「候文」の課題は、当時、身分が上の者(代官所、関東取締出役など)から下の者(名主など)に対して命令を回覧させる(廻状)際の決まり文句であった「早々順達 留より可相返候」です。「早々に順達し、留(とまり)より相返すべく候」と読み、「急いで順に回覧し、最後の順番の村から役所に返しなさい」といった意味です。

漢文(中国語)と日本語が混ざったような語順で書かれているため、実際に読む文字の順番と書かれている文字の順番が異なっているのが特徴です。日野でも、名主の佐藤彦五郎が筆写した代官所や道中奉行所からの命令書(御用留)の中によく見られる表現です。

また特に「大至急」であることを強調するような場合には例文のように「早々順達」の代わりに「昼夜二不限(＝昼夜の別なく)継送」などと書かれていたりします。また「留」とは(回覧順の)最後の意味で、「留村」と記されることもあります。



日野宿御用留(部分) 日野市所蔵
慶応3年(1867年)7月

日野の名主(村長のような役職)で、土方歳三の義兄でもある佐藤彦五郎が代官所や関東取締出役などの役所から来た命令書などを写してまとめたもの。

【翻刻】七月晦日交代

(中略)

- 八王子宿組合
- 日野宿組合之内
- 農兵五人
- 青梅村組合之内
- 同 三人
- 日連村組合之内
- 同 一人

右之通交代願度旨農兵人共申立候間

得其意 代り農兵共途中不作法無之様申付

観音崎台場へ可差出候 此廻状昼夜二不限

継送り 留より可相返候 以上

江川太郎左衛門

卯七月廿九日 役所

右村 組名
頭主

【資料の内容について】

江川代官所より日野宿など多摩の村々に出された農兵隊に関する廻状の写し。

京都で近藤や土方が活躍していた頃、多摩では治安の悪化や政情不安の中、幕府の命により「自衛組織」として佐藤彦五郎ら各村の有力農民を中心に「農兵隊」が作られた。

やがて農兵隊は当初の目的と異なる「幕府軍の予備兵力」としても期待されるようになり、長州征討の後詰兵力として大坂(大阪)への出兵さえ計画された。これは「農兵取立は自衛のため」と聞いていたのに、話が違う」という村々の強い反発により中止されたものの、慶応3年(1867年)3月からは日野宿を含めた多摩の農兵隊が、観音崎(現神奈川県横須賀市)砲台の守備兵として動員されることになった。

これについても村々の負担が大きいため、農兵の交代について村々から出された要望があったようで、本状はその要望に対して代官所から出された回答にあたる。

課題③「永倉新八」

一番隊組長「沖田総司」に続く人名シリーズ第四弾は、新選組二番隊組長などをとめた「永倉新八」です。

松前藩出身の永倉は本名は長倉でしたが、剣術修行などのため脱藩した際に変名として「永倉」(読みは両方とも「ながくら」と名乗ったといわれています。はじめに神道無念流の岡田吉貞に剣術を学びますが、市ヶ谷(現新宿区)にあった近藤勇の道場に赴いた際、近藤と意気投合し食客となったと伝わり、文久3年(1863年)の浪士姓名簿でも沖田総司や藤堂平助らとともに近藤宅に居住と記されています。

浪士組として近藤・土方らとともに上洛し、新選組二番隊組長などとして活躍しました。柏尾(勝沼)の戦いの後、近藤と意見を違えて新選組から離脱しましたが、戊辰戦争後はかつての新選組の仲間を引、現在のJR板橋駅前にある近藤と土方の墓を建てたほか、佐藤俊正(彦五郎)や松本順(良順)とも交流を続けました。また、明治初期には新選組に関する記録『浪士文久報国記事』を著し、晩年には新聞記者の取材に答える(『新選組永倉新八』後に『新選組顛末記』と改題)など、新選組の実像を後世に伝えようとしていました。

課題④「黒船」

今回から加わった、小学生の方にも書きやすい、幕末の歴史をたどる易しめの漢字を使った短い単語の課題です。第一弾は、嘉永6年(1853年)に開国を求めて日本にやってきたアメリカの軍艦「黒船」としました。黒船は木造でしたが、防衛を目的として黒い塗料で塗られていたため、「黒船」と呼ばれました。その巨大さと、蒸気力で風が無くても航行できることに当時の日本人は驚き、恐れしました。

黒船の来航により長く続いた江戸幕府は揺らぎ、後に「幕末」と呼ばれる時代が始まりました。